

花
筐

花筐

中里恒子

新潮社



© Tsuneko Nakazato 1975, Printed in Japan

花 はな
籠 がたみ

昭和五十年十月十五日 發行
昭和五十三年三月二十日 二刷

定價 一一〇〇圓

著 者 中里恒子 なかざと ことこ

發行者 佐藤亮一 さとう へい

發行所 株式會社新潮社

182 東京都新宿區矢來町七十一

Tel・業務部(03)二六六一五一一

・編集部(03)二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式會社

製本所 神田加藤製本

製函所 株式會社中田製函

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
擔にてお取替へいたします。

目 次

	終	夢		も	花	
◇		の	◇	の		◇
				言		
				は		
				ぬ		
	身	木		花	筐	

87

55

33

7

静かな晩

125

相生ひ

153

浮繪

175

車井戸

199

◇

花を持てる童女

225

◇

あ
と
が
き

238

裝
畫

福
田

喜
兵
衛

花

筐

花^{はな}

筐^{がたみ}

ひえひえした秋の終りの日影が、道路にくつきりと伸び、下水溝のふちに、かまきり蟬がじつと動かずにゐる。

やすは歩きながら、その蟬に氣づいた。長い脚が靜かに動いたと思ふと、ぱつと羽根をひろげて、蟬は飛んだ。やすは、いそいで其處へ駆け寄つた。

伸び放題に伸びた夾竹桃の垂れ下つた枝に、蟬は、死んだやうにとまつてゐた。飛んだことなどは、露さらさらも見せずに、折れた枝のやうに見える。

松とひまらや杉が生ひ茂り、ざわざわ揺れてゐた。奥に、どこもかしこも閉つた白い建物があつた。教會なのだ。

やすは、暫くその前にたたずんでゐた。結婚式が、教會で行はれたのを、やすは見たことがある。そしてまた、お弔ひが、しづしづと行はれたのも、以前、見てゐる。

教會の前に立ちどまつてゐるやすの、胸のなかで、二つの形式が折り重なつてゐた。……白いヴェール、靜かな歌聲を、思ひあはせ、なにか、いまのやすの思ひ出にはそぐはないものが、

さういふ歌聲のなかに流れてゐるやうな氣になつて、まるで、螳螂のやうに、そつと其處を離れた。

この間から胸につかへてゐた一つのことを、また、はつきりと心を占める。

やつぱり、やすひとりの、鳥羽の弔ひをしたい、といふ感傷の、誰に明かしやうもない、衝動である。

年の内と言ふよりも、もはや、まもなく、藤ヶ谷の家を出てゆくやすにとつて、そのあと遠からずに、あの家がとりこはされ、ひと手に渡つてしまふといふ事實に、一層心ざわいだ。

ここは、鳥羽が身の果てに、昔のもちものの最後のよりどころとして、やすとともに、恐らく一生のうちで、心足りた日日を過した場所であると、やすは、さう思ひこんでゐる。

鳥羽だけではない、やす自身にも、屏風をたてまはしたなかに、じつと籠つてゐたやうな、あたたかい、安心な、ここだけに日光の當つてゐたやうな靜かな年月があつた。

鳥羽が、出先で倒れ、そのまま病院で死んでからのちも、やすは、さういふことが鳥羽の身の上に起つたことを、どれほどか、不本意であつたに違ひないと推量してゐた。それほどに、ふたりの住んだ家には、鳥羽の思ひが残されてゐる氣がしてならないのだ。

「死んだら……さうだな、化けて出て来るだらうな、そのために、柳の木を一本植ゑなければいけない……」

「柳でないと、出にくいのね、」

「この家は、松ばかりだから……櫻の木と松ちやあ、舞臺のやうで、だめだ、」

「死んだあとのことまでに、好みがあるんですね、」

「それだけのわたしの思ひがこもつてゐるのだ、」

やすは、おもしろ半分で話し合つたことが、それが、鳥羽の本心だつたと氣づいたのは、鳥羽が、やすの手の届かぬところで死んだあとのことである。

あのひとは、よく日の當る二階の、がらんとした、僧堂のやうな部屋でやすの手を握りながら、身の果てを迎へたかつたに違ひない、やすは、さう思ひこんでゐるうちに、ほんとに、鳥羽が、ここで、靜かに身を終へたやうな氣さへして來る。必ずしも、事實を、事實として認めなければならぬ出來ごとではなく、やすも、そして死者も、ともに満足出來る死の在りかたを肯定することで、いくらか、やすの氣持もやすらぐのだ。

家を出る前に、なにかの形で、この場所の同向をしたいといふ念が、同時にやすの胸を、往來しはじめてゐた。

ここで、鳥羽とやすの、あかりのまたたくやうな、短い日日が終つた。

ひとも月日も死んでしまつたのだ。

そして、揚句の果てに、この家までもなくなつてゆく。死者そのひとだけでなく、死者をとりまいてゐたことごとくのものものの終りを、はつきりと、やすは鎮めたい氣になつてゐる。

その日も午後から、やすは、町へ出た。

あてもなく歩いた。風が吹き、まぶしい陽光が、眼前をきらきらした。

やすは、うちへ戻れば、鳥羽が縁側に坐つてゐるやうな、心せいた氣持で、歩いてゐた。

町角の商家の前で、托鉢僧が喜捨を受けてゐた。黒衣の、若い僧が、二人、三人、足早に歩いてゆく。やすは、あとについていつた。

一人が、ためらひもなく、開いた門深く、つかつかはひつてゆき、高だかと經を誦しはじめる。つづいて一人、肩を並べて讀經した。

やすは、門の陰に立つて、僧の經の終るのを待った。不意に、さうする氣になつたのだ。

風が吹いて、櫻の葉が散る。

尾花の白い穂が、小道に揺れてゐた。

二人の僧が、誦しながら出て來た。やすは、その前へ出て、す早く頭を下げた。僧の一人が、立ちどまつた。

「あの、おたづね申します、手向けのためのお經を、お願い出來ますのでせうか、」

〇〇寺僧堂と染めぬいた頭陀袋をかけた僧は、黙つて、やすの顔をみた。

また一人、そばへ近づいた。

やすは、二人の僧の前に、同じことをたづねた。

「……あたくしのうちで、御命日の同向をしたいのでございますが、お願い出來ますでせうか……うちは、一つ先の停留所の、藤ヶ谷といふところでございます、」

「はい、」

やすは、思はず、若い僧に、頭を下げた。

「托鉢の御都合は、いつがよろしいのでございませうか、」

「いや、そちらの御命日に……」

「わざわざ申しわけないのでございますが、この十七日が、命日になりますので、」

僧は、二人で話し合ひ、僧堂へ戻つてから、托鉢の日程をたしかめる爲、いま時間はきめられないが、あとでお知らせしませう、と言つた。

「はい、それは御都合のよいやうに……藤ヶ谷は、おまはりになつていらつしやいませうか、」
「どのへんですか、」

やすは、丁寧に、道じるしを話した。

「あのあたりでは、古い、これはかかつた家で、鳥羽と申します、」

僧は、うなづいて去つていつた。

やすは、胸のつかへが下りたやうに、晴れ晴れと歩き出した。ゆきずりに、回向を頼めたと
いふことに、すがすがしい氣がしてゐた。

鳥羽の命日は、明日、あさつて、しあさつて、四日あとである。

終つてしまつた日を、死者とともに、やすは、自分も含めて弔ふのである。

ここから、ここまで……すうつと、赤い線を引くやうな、一つのけちめ、さうも思ふ。

やすは、徐々に、なにかが、自分から剝がれてゆくのに氣づいた。まだ鳥羽の死後、百日とは經つてゐない。それなのに、鳥羽の顔が、もう定かではなかつた。

やすは、縁側に坐つてゐる鳥羽の、がつしりした背中を思ひうかべることはあつても、顔は、單に、能面のやうにすべすべしてゐた。起伏の激しかつた鳥羽の生涯を思はせた、精巧な表情を思ひ出すことを、わざと避けてゐるやうに、だんだん、ぼうつとして來る。

どうでもかうでも、寄る邊のなくなつた寂寥を、やすは無意識に拂ひのけよう拂ひのけようとしてゐる。

死者は、日が經てば、次第次第に忘れ去るといふものではなく、生者の胸に、却つて、日々とともに思ひがつよまることを、やすは、すでに經驗してゐた。鳥羽との日々は、そっくりそのままことごとく夢のなかの、氷花として、やすのなかに封じこまれてゐる、だから、思ひ出したりする必要はないのだ。

そして、ふたりのゐた場所も、やがて、あとかたもなくなる。

やすは、むしろ、それが本當の此の世のやうな氣さへした。

道ばたの石佛に、野菊やコスモスが供へられてゐるのを、やすは、幾度か見てゐる。微笑ましい、悲しい、誰か知らぬひとのあたたかさが、其處に見えた。――

やすは、僧の來る日を待つた。